

同人作品

友便り 秋山義仁

こんにちわ此処どこですか？むかし村人が居ました犬猫トリも
日差しから目を外しうつむく冬の陽がたたみからかべへと背を伸ばす
老いていく我等が仲間未だ在りて棲む人あればこの家上げる
緑濃き家が点々空家です手入れなき木々自由に伸びて
友便り睦ちゃん節ちゃん老健へ博は逝った何か寂しい
人が減り空家ばかりの故郷の小学校閉鎖百二十年の歴史
学校の裏山古墳どうなるか自然に埋もれるか茶畑か
もういいよ何処に居る直ぐ顔見せる電話はかかるでも出ない
彼奴どこ？死んだと聞いた孤独死よ絵書きだったよ親友だった

脱帽子顔も同じの母子連れこんな田舎でピアノ発表会

繁^{シゲ}は二軒前のケンカ友開紋岳の土産繁盛セイロン海亀剥製人気

繁^チん家馬が棲み可愛いく怖い馬の田鍬の大拍手に柏手

春男ん家皆で働らきでも貧しい北鮮帰還生きてほしい

安の家払い続けた資産税尖閣は日本のもの中国でない

裏の二人は仲良し女子結婚し偶然会った山ん中婚家は近い

片親の秀^{ヒデ}は弁論得意得意活かして営業へ移り大出世

正義漢^{タダシ}忠はデカ一筋四十年勲章もらう今は防犯ボランティア

級長の恒は今も級長まとめ役二年に一度はクラス会してほしい

半数が中卒就職の我が世代健の子高卒孫は大学生

全に凶拔けの睦ちゃんカグヤ姫遠くからただ見上げてた

博労の敬ちゃん家は黒い斜陽館ここをすぎると険しい九州山地

母の友高女母持つ努は大変参観時先生困らす母の質問

和と高ずつと不思議な貴族の子小五で分った戦争遺族の家

誠の兄は身障者這うだけで学校結婚いろいろあつたもう死んだけど

少しづつ少しづつ好き重なりでも言えなくてかぐや姫の君

そこはかと都会の香りの転校生君ちゃん高校までの遠いあこがれ

裏の子は片親で三人息子の中養子に出され逃げ帰る僕の友

巖死す横浜で病死だと妹あり還暦結婚の初婚とのこと

実ん家竹の子大變博の分もある人力だけで季節ものだし

富ちゃん小学校好きでお茶屋辺りうろうろと婿貰い^{ムコ}がんばって八女茶売ってる

三井争議有明海戦友は組合悪友は資本今は鉄骨赤錆だけ

可奈は遠縁同級生手紙にワクワク内容は幸福の手紙でした

友が泣く妻が逝ったと今日も泣く頭もセットする良い妻だった

貧農で飲んべえの子の良は山道で同級生襲い少年院ヤーさん消息消えた四十才
襲われた桜は里におれずに二十五才で消息絶えたと聞いた

徹は数学教授うま酒と訳の分らぬ数式の分程式を今も解く

熱愛の純と潤還暦同窓会で再会全てを捨てて大阪ドヤ街に消える

釜ヶ崎地縁血縁なき二人ゼロからスタート沙中に幸ありつかぬ逃すな

親子孫家墓地仕事全て捨てその価値ありかなうならば別れるな

あの双子二卵性で似てはないでも死ぬ時一緒離れていても一緒

夜のクラビノーバ 石邊綾子

虹の橋サクラは待っているだろういつしよに渡る約束だから
幻影を払ってどこへ捨てようか断捨離できずにくずれた目玉
羽のない扇風機みる。危うさのかけらも捨てた無害のきみと

恨み言ひとつも吐いてくれたなら。君はりんごをしゃりつと嚙る
栗の実が転がっているテーブルの上にはむしろ母の思い出
感情を仕舞って帰るパソコンとともにパターンと明日の朝まで
通せんぼ切り絵細工の町並みにあの子の広げた手のひら浮かぶ
花伝書のむげに散らしてしまいが時分もとうに過ぎたり哀れ
カタツムリ季節外れに出たものの引っ込みつかず縮まっている
不動前の駅に降り立ちいよいよと長夜へ向かう人を見送る
悔しさのかけらもないというように遺影の視線は通過してゆく
燃え残り炭にもなれず白檀のやがて香炉の底に果てたり
日めくりの重み傾く春うらら吾もそろそろ卒業のとき
鍵盤をポロンと鳴らせばこの指が覚えていたかのような感触
「月光」をクラビノーバに弾かせつつ我は歪んだ遠景となり

運命 井上省吾

運命は考えひとつでどうにでも変えること出来知ることにある
運命はわが内にあることを知り心次第で未来を変える
すぐそこに百歳迄後少し未知の世界を楽しく過す
元気よく希望をもつて進むとき生きる喜び味わいながら
明日もまた楽しい暮し願いつつこのひとときを大切にす
春近し暖かい日と寒い日が繰返し来て季節は変る
体にも調子よい日悪い日のある暮しでも有難く受け
五感では感じられない事がある神に祈りて道を外さず
神棚の水取替えて祈るとき有難きかな生かされている
仏壇に御先祖様をお呼びして朝のあいさつ夜のあいさつ
父母と妻の写真前にして語りかけてる毎日のこと

日光浴

窓からの陽の光浴び暖まり寒さしのいでああ幸せだ

窓越しに差込光みつけては日光浴と体なげ出す

おだやかな日の光浴び建国の日丸たてて平和を祈る

片付けを始めてみたが思い出がよみがえりきて先に進まず

風強く寒い朝だが元気よく外の仕事をやれる嬉しさ

ジュウタン奥まで伸びた日の光陽も高くなり半分程に

梅の木に数輪開く花を見て春も真近と心待ちする

梅の花やつと咲き出し喜びも寒の戻りで花もおどろき

水仙に白い花咲く早咲きとこれから芽吹く遅咲きがある

元気よく枯葉の中に芽を出して出番を待つは春の草花

寒さたえ新芽を作り春を待つ庭の木々たち力をもろう

実の成る木柿の木ミカンサクランボ梅の木キウイ桃の木もある
ぼっかぼか陽が差込んであたたかく椅子に座って疲れをいやす
元気よく庭の草取り始めたら時を忘れて一心ふらん
何事もやり始めたらのめりこみ時の立つのも気にせず動く
あたたかさこのままずっと続くのか梅もほころび満開近し
雨の朝寒の戻りで寒くなり乾燥してた大地に恵
二階から眺めた時が美しい日本だけだが梅の花咲く
携帯の天気予報で雪マーク見たくもあるが心配もある
水仙の花も喜ぶ雨粒で乾燥続き少しうるおう

数珠とタバコ 甲村雅俊

父が死ぬその実感のなきままに日暮れになれば日は沈みたり

このときがつひに來たねと電話にて父の危篤を弟に言ふ
清やかに棺の中のわが父に数珠とタバコを持たせて別る
とりどりの季節の花で飾りたるわが仏壇に阿弥陀まします
飛來してああこんなにも吹き溜まる芥子色なる厭はしき粉
真夜中に目覺めて人を呼ばふなり如何な不安にかられて母は
まろやかな眠りにあれば飼猫の規則正しく波打つ体
毎朝のお勤めつづくわがこころを仏の光で照らしたまへと
仏壇の花瓶に差せる白菊の花の落ちれば葉の青々として
暑ければネコ横たはりその横にわが横たはる日曜の午後

日時計 氷室敬子

やすらかな眠りのためにさわさわと空腹を満たすお茶漬け食べる

爪を切りやさしき嘘のささやきに耳くすぐりて誘いてはみぬか
はい立ってまつすぐ立ってそれができぬ私は劣等生であるなり
濡れ縁と知らぬわれは滑り込み母はわれを背負いて医者通いせり
ことごとと体を洗う美容師達そのあと美容師達のひそひそ話
こくこくと刻みいる日時計 S E I K O わがメール便は届いたか
細巻きも手巻き寿司もこれは美味いとささやきあっている
だれにでもくせはあるくせある人間は仏にはなれないか
ゲ、ゲツと食べ過ぎました芋も大根も煮直す美味しくて
東向き大硝子の前に集りて猫も毛を梳く吾は一人の時間持て余す

立春 本田洋子

紅白の梅の蕾の膨らんで教会の庭如月の空

立春と言へど厳しき寒さかなされど沢では芹セリが育ちぬ
夕五時の陽伸びて明し空の色立春の夕方子らが帰る
血圧が原因したか入浴に失敗をして布団に潜りぬ
覗き見るカーテン摘まんで夜の庭うつすら雪が冬との別れ
各地方立春過ぎての雪マーク関東のみが風雪知らず
春霞む町の小さな公園の地面を見れば蟻が働く

骨折

卯月二日布団の段差にひよいとすべり尻もち着いただけだったのに
その折に内蔵に響く重圧が何か分らずドシンと走る
それからは腰が痛んで歩けずに寝たり起きたりするばかりにて
病院に掛かりたるは一週後レントゲン結果にて骨折判明
幸いに小さな骨の骨折で 医師「くっ着くまで待ちましょう」

情なや体動かず用事は溜まる 行事はすべてキャンセルとなり
こんなにも一本の骨が大事かと腰骨折ってよくよく知りぬ
コルセット、膝サポーター、杖付いてすっかり老人に成りてしまひぬ
雨の日は家で静かにして居よふ ポキンと折れた骨が着くまで

春雷

ランドセル桜の下で写真撮り スキップしている二人の子ども
満開のソメイヨシノに顔埋めハナムグりに成りたる気分
気のせいか今年の花の紅の色例年よりも濃く見ゆるのは
ドシーンと天をつん裂く春雷に一人暮らしの淋しさ覚ゆ
釈尊の四月八日は誕生日 甘茶を掛けに寺へ行かなきや
頭上から歌がぞろぞろ降りて来て 古稀を迎へし朝のことなり

若葉

ラザニヤの緑濃き葉の艶やかさここぞとばかり一せいに咲きぬ
タンポポがツツジの下から顔を出すその愛らしさに引きつけられて
ラザニヤを手折ると白い露の出し小瓶に挿して見るのもいいね
ラザニヤの花はガーベラに似ている細い花卉の強き花かな
ジャスミンの香がぐわし十年前わたしは一人家を出て来し
いと小さきイチョウの若葉散りにけり雨粒乗せて可愛い形
朝五時に遠き山から聞こえるホーホケキョと澄み透る声
藤棚の下に座ればムンムンと若葉の匂ひチョウが横切る

記念日

十数年引きこもりたる吾が娘 初めて電話してきた記念日
雨の日に帰りの吾を気づかひて 車の手配してくれし娘こ
霧晴れて吾に対する憎しみを暫し何処に置き去りにしてか

気付かぬが神のみ光り頂きて暗きトンネル脱け出して来ぬ

あすありやあり 丸山 光

百円の書棚にならぶそれぞれの思いのつまる歌集と句集

ご和算で願いましたは春はまた冬の寒さに戻ります

病室のカーテンなどは引もせずみなを笑わすガンの嘶家

生きるとは生かされていることと信じるまでの長き年月

共通の経験なれど共感を得られぬ妻の背中みている

希望しかなかった頃の思い出はキミと交わしたプロレス談義

ひとつずつキミの心をあけていく愛という名の鍵を使って

よろよると春一番に脚とられ哀しみながら春を喜ぶ

すべからず良しとはいえぬ生き方を仕方がないといいきれぬ老い

髪の毛を瞬時に数える神さまは僕らを見ながら笑っているぞ

スーパーに行く回数を減らしても支払う額は前より増える

お父さん語ったように生きてねと親子関係すこしこじれる

春風にとばされながら歩くうちペガサスになり両手ひろげる

脚しびれ腰痛・肩こり・物忘れつまりわたしは生きております

やりたいとやってみたとは雲泥の差があることを知っててやらぬ

人殺す殺し方にも差がありて人間以下と非難をあびる

酒・煙草どちらもやらずに老いるとはつまらぬ人と言われて黙す

すりへった母の使いし印鑑を最後に押して母を葬る

赤ちゃんも兵士も同じことばで括る匍匐前進哀しい言葉

天国のひかりが漏れて輝くか星を揚げばキミを思いぬ

医者かわり薬もかわり病状は変わらぬようにと祈る日々

観覧車みわたす限り田畑の前に座りしキミを観覧

わたくしの分まで背負う母親の鬱のおかげで元気に生きる

イメージは豊かにあれど実体は誰も知らない天国・地獄

半ズボン短かい脚をすこしだし四頭身の孫が笑えり

晴わたる五月の空に七月と八月さえも紛れ込む 夏

半年に一度だけでは慣れませんまたあす尻にカメラが入る

悲しみは忘れず怒らず受け止めて今を生きる力に変える

白内障・網膜剥離・糖尿と大腸癌をいただきました

七夕もはるか昔の物語ころばぬようと手をとりに歩く

水槽の擬似水草に囲まれて動かぬ金魚はロボットに似る

親泣かす子どもはいても子を泣かす親のニュースは哀しかりけり